

二〇三三年一月二四日

群鳩の翔ちて落葉を舞ひ上げり
菜畑今朝まばゆきほどの霜光
興に乗るぬり絵の夫と日向ぼこ
陽の窓に香箱座り猫小春
僧院の白きクルスや冬晴るる
咳をして人目気にする電車かな

二〇三三年一月二三日

パレードを寿ぐごとく銀杏散る
植木屋の跡取りが来て年用意
伊勢路抜け動くものなき冬田かな
濃き霧を貫き馳せる新幹線
裁縫の特等席や縁小春

二〇三三年一月二二日

散紅葉敷きて水底賑はへる
悪声を落として翔ちぬ冬鳥
マリア像ベールのごとく紅葉影
一穢なき冬青空へ父逝きぬ

二〇三三年一月二二日

身ほとりを片付けながら大根炊く
三輪山のふもとと広がる大根干し
特攻の出撃跡地枯れすすき
酒蔵の白壁鎧ふ蔦紅葉

康子

千鶴

やよい

素秀

せいじ

もところ

みきえ

せいじ

もところ

明日香

康子

満天

なつき

せいじ

むべ

もところ

明日香

千鶴

澄子

二〇三三年一月二〇日

大根と法衣干しある里の寺
海望む寢墓に手向く冬薔薇

たか子

澄子

二〇三三年一月一九日

大路までひと見送りぬ冬の月
元氣かと気まぐれ電話冬ぬくし
母ひとり子ひとり七五三詣り
合掌のごとく翅合はせ蝶凍つる
ママチャリの籠に団栗二つ三つ
黄落の高舞ふもありつむじ風

ぼんこ

むべ

二〇三三年一月一八日

朽木めく老幹なれど冬芽もつ
水鳥の影もろともに潜りけり
鉄塔の真上に凍つる匕首の月
出来たての霜きらめかせ朝日出づ
枯葦のぞめき隠れに川眠る

ぼんこ

素秀

たか子

明日香

素秀

毎日句会みのる選・二〇三三年一月二六日